



[令和 6 年 9 月 11 日 定例会発表要旨]

前田農場について

ノンフィクション作家 森山 祐吾 様

近代農場の模範 「前田農場発展史」

手稲区人口 14 万人のうち、2 万 4 千人が住む前田地区は、近年、新興住宅地として急速に拓けたが、かつては広大な農場地帯であった。この地区は明治の開拓初期から泥炭湿地の不毛地帯であったため、開拓者の入地は困難とされた。しかし開拓者たちのフロンティア精神は、こうした悪条件を克服して、広大な原野を切り拓いたのである。



この地の組織だった開拓は明治 27 年(1894 年)旧加賀藩前田家当主・利嗣が、前田家の財政基盤の確立のため、開拓の先導としてこの地にだいた農場を創設することを決意したことに始まる。しかし草創期から度重なる冷害や暴風雨、石狩川の氾濫などの被害を受け、小作人が生活に窮して激減するなど、さんざんな有様だった。

利嗣はこの窮地を脱するために、経営を始める前に欧米に出張し、近代的な農業事情を視察。その成果をもとに、経営を思い切って立地条件に適応する酪農・畜産事業へ転換しさらに畜力と欧米の農機具の使用によって生産性を高めていった。

以後、農業経営に優れたリーダーシップを発揮し、北海道における画期的な試みである育牛経営による大規模農場に転換。同時に畜産改善・乳酪製品の製造と販売に力を注いだ。さらに他の華族や大資本家のように、不在地主として単に小作収入を得るのではなく、直営大農場方式を進めるために必要な資本を投下し、バターなどの乳酪品の加工・販売で利益を上げようとした。

これは他の農場のように人的搾取経営でなく、資本力による近代経営に徹することを心掛けたのである。突き詰めれば前田家当主の 2 代にわたる資本家的経営者としての才能と、先を読んだ決断力にあったといえよう。

明治 33 年、利嗣の病没後に跡を継いだ利為は利嗣と同様に乳牛の品種改良に力をいれ、乳量の多いホルスタイン種牡を輸入。これは北海道における畜産改善の歴史的な試みだった。こうした酪農・畜産事業に重点をおいた前田農場の経営は、大規模な牧場経営の先駆的模範例として北海道開拓に貢献し、また全国各地でも手本とされた。

前田農場を廃止し、すべての土地処分が完了したのは戦後の昭和 21 年だった。こうして日本初の大規模な直営農場・畜産事業を積極的に展開し、議界と地域発展に尽くした前田農場は、このときをもって、50 年の歴史の幕を閉じたのである。

補記・前田農場が積極的に手がけた酪農によって地域開発を進めようとする試みは、昭和に入り、独立した自作農に継がれた。彼らが一致団結して、念願の酪農郷を築いた石狩・手稲沿いの両側には三角屋根のサイロと草を食む乳牛が見られるようになり、この風景はミルクロードとして昭和 30 年まで続いた

「講師のプロフィール」

- ・名前 : 森山 祐吾 [もりやまゆうご] 北海道史研究家 ノンフィクション作家
- ・生まれ : 1940 年 (昭和 15 年) 12 月 2 日 満 83 歳
- ・出身地 : オホーツク管内雄武町
- ・現住所 : 札幌市中央区宮ヶ丘

現在の活動 : 主宰・講師「北の歴史塾」年間定期講座 12 回 場所 かでる 2・7
 “ 「北海道史を学ぶ会」 “ 12 回 “
 : 道新文化センター歴史講座 24 回 道新ビル
 : 「北海道ノンフィクション集団」会員
 : 「ほっかいどう学を学ぶ会」 会長

受賞歴: 北海道ノンフィクション賞

- 第 30 回 (2010 年) 佳作
- 第 31 回 (2011 年) 佳作
- 第 32 回 (2012 年) 準大勝
- 第 33 回 (2013 年) 大賞



歴史を学ぶことの意義

講演中の森山祐吾様

脳は筋肉と一緒に、使わないと退化すると言われます。

それには過去の歴史を学ぶことが有用で「自分の頭で考える力をつけ
 時代に翻弄されずに生きてゆくことができる」ようになるからです。

これからの長い人生、歴史を楽しく学ぶことで、今まで以上に自身の人生を充
 実させ、そして輝くものにして参りましょう。このことを「憲政の人」と呼ばれた政
 治家・尾崎行雄はこういっています。

「人は何歳になっても、それまでの人生は序章に過ぎず、これからが本舞台。人
 間にとって知識と経験程尊いものはなく、その二つは年ごとに増えていく。すなわ
 ち人間は歳を重ねるほどその前途は輝かしく、多望である。」



幕末時の北陸
地方の前田藩
勢力支配地図

幕末時の全国勢力

前田藩	102万石
島津藩	76万石
伊達藩	60万石

(当日 配布された資料は 12 ページ)

北海道科学大メディアデザイン学科と共同作業が実現

2024.8.10(文責:沖田)

このデザインは、今年1月から科学大学側との打ち合わせの結果誕生したものです。デザインの基になるテーマを手稲郷土史研究会が提供し、それに擬人化されたキャラクターが創られました。この度8月10日、同校の100周年記念式典が”ひたる”で開催されましたが、その会場入り口に展示され紹介されました。私たちの想像をはるかに超える出来栄となりました。

パネル全体



パネルの大きさ

H=2000mm

W=1500mm

*左上のキャラクターデザインと裏面に説明文



学生による A 図の解説

キャラクター名

- 1, 手稲山：嶺(れい)、大学 2 年、182cm、ちょっぴり天然な長男
- 2, サッポロカイギウ：羽竜(うと)、小学 3 年生、小悪魔で、あざとい末っ子
- 3, 手稲石：碧(あおい)、高校 1 年生、1 兄弟に愛されまくりな長女
- 4, 手稲遺跡：結牙(ゆいが)、高校 2 年生、いたずら好きな次男

制作意図、感想

4 人のキャラクター全体の色を考慮し、並んだ順に紫から緑のグラデーションになるように配色を考えた。キャラクターの性格が伝わりやすいように服装やポージングを決め、ただの立姿よりも躍動感が生み出されるよう意識した。また、普段の自分が好んで描いているイラストよりもトーンを明るくし、多くの人々に好かれるようなアニメ感を演出した。手稲山は、上から下にかけて雪、植物、地面のイメージで配色し、ヘッドホンに電波塔イメージのモチーフを付けている。またジャケットやエプロンに花やツタのデザインを組み込むことで優しいキャラクター性を表現した。手稲遺跡は先にポージングから考え、小さいモチーフに躍動感を付けることでイラストとしての完成度が上がるように考えた。妹をからかうイタズラ好きな次男のキャラクター性を表すため、表情を少し意地悪な笑顔で下から見上げてくる構図にした。出土品であるサメと縄文土器をメインモチーフに設定し、随所に配置している。脇に抱えているのは弟が好きなサメのぬいぐるみであり、面倒見の良さも表現した。特に手稲遺跡は出土品の中から選定したため難易度が高かった。手稲山はモチーフの案は様々あったものの、季節感や画面映えを考えると組み合わせる要素が少なく、またキャラクターの性格的にも大胆なポージングが出来なかったため難しさを感じた。

次回定例会 11 月 13 日 18 時 15 分 区民センター 2 階 第一第二会議室

発表内容「石、よもやま話」 研究会特別顧問 若松 幹男 様

手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第 198 号 令和 6 年 10 月 9 日発行
発行責任者：沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会長） 編集：立花邦雄・川上義昭

❖ 006-0818 札幌市手稲区前田 8 条 11 丁目 4-5 林俊一方 手稲郷土史研究会

*TEL 090-3381-4994 *FAX 011-682-9874

❖ メールアドレス teinenorekishih@gmail.com 担当 菊池 博行